漢文教材における戦国七雄への視点——趙国の場合——

槇口 敦士

はじめに

高等学校の漢文教材の中で戦国時代について「史伝」をもとに学ぶことは、中国の歴史を学ぶ上で非常に重要である。特に趙国について学ぶことは、中国史の理解に欠かせないものである。漢文教材における戦国七雄への視点について、趙国のケースを例に挙げて考察したい。

【概要】

高等学校の漢文教材の中で戦国時代について「史伝」を取り扱うものとして採用されている場合が多く、趙国の歴史についても多くの資料を取り入れている。特に趙氏の「趙氏戦争」に関する内容は、漢文教材における戦国七雄への視点として非常に重要である。

【要旨】

趙国は、戦国時代の重要な国であり、趙氏の歴史について学ぶことは、中国の歴史を学ぶ上で非常に重要である。特に趙氏の「趙氏戦争」に関する内容は、漢文教材における戦国七雄への視点として非常に重要である。

【内容】

趙国の歴史について学ぶことは、中国の歴史を学ぶ上で非常に重要である。特に趙氏の「趙氏戦争」に関する内容は、漢文教材における戦国七雄への視点として非常に重要である。
趙国について

二 趙国について

趙は現在の河北省と山西省を中心とした強大な勢力圏であ
漢文教材における戦国七雄への視点－趙国の場合－

（1）趙襄子と『呉亡呉滅』の考察

現行の漢文教材の中では、趙襄子を話題にした内容がいくつか散見される。特に、趙襄子の活躍をめぐる『呉亡呉滅』の内容は、趙襄子の立場を捉え、以降の趙国の国際位置について考察するに役立つ。趙襄子は趙国を分裂した大名の一つであり、趙国を統一に導くために様々な努力を行った。

趙襄子は趙国の改革を推進し、趙国の国力と国際地位を高めた。趙襄子の改革は、趙国の国力向上を図り、趙国が他の大国に対して懸命に対応することを可能にした。趙襄子の改革は、趙国の国際地位を高め、趙国が他の大国に対して懸命に対応することを可能にした。

趙襄子の改革は、趙国の国力向上を図り、趙国が他の大国に対して懸命に対応することを可能にした。趙襄子の改革は、趙国の国際地位を高め、趙国が他の大国に対して懸命に対応することを可能にした。
『史記』『刺客列伝』にも同様の記述がある「刺客」の一例で、戦国末期に秦の始皇帝の暗殺を試みた刑軒が思い浮かぶ。刺客なり自己を犠牲にしてまで大役を果たそうとしたものの、無念の気持ちで散った人物の姿には胸を打つものがある。刑軒は、「当初范氏、中行氏に仕えたものの、どうらからも厚遇される」太平洋は、智者さものとしで国土の扱いを受けた義理を夢んで声を変えても、仇である趙襄子を討つため、結局は討ち果たすことができず、趙襄子から讒言を受けた衣服を剣で三度突いた、「これである世の智者に顕向すことを」という言葉を放って復讐を決意する。原因として智者たちの傾向をと、結局は討ち果たすことができず、趙襄子から讒言を受けた衣服を剣で三度突いた。「これである世の智者に顕向すことを」という言葉を放って復讐を決意する。原因として智者たちの傾向をと、結局は討ち果たすことができず、趙襄子から讒言を受けた衣服を剣で三度突いた。「これである世の智者に顕向すことを」という言葉を放って復讐を決意する。原因として智者たちの傾向をと、結局は討ち果たすことができず、趙襄子から讒言を受けた衣服を剣で三度突いた。
十八史略は、小説の如き如きになる。戦国の危険、群雄の集大成を、二つの変動を経て、新たな世界を創り出す。戦国時代の群雄を、一冊に収めた十八史略は、物語の世界を広げ、歴史を新たな角度から観察する。
《戦国七雄への視点—趙国の場合—》

(3) 赵文王と『完璧帰趙』故事

趙文王の時代に当たり、趙文王の時代の故事『完璧帰趙』について述べます。趙文王の時代には多くの人物が登場しており、その中でも重要なのが蔺相如です。

趙文王の時、蔺相如は趙国の重臣となり、趙文王の機敏な政策を支えています。趙文王の時代には、趙国の国力は強大であり、趙文王はその国土を守るために様々な戦略を講じています。

しかし、趙文王の時代には、趙文王の政策に対する批判が起こっていました。その中でも重要なのが蔺相如です。蔺相如は趙文王の政策に対する批判に対して、趙文王に真実を教えるために『完璧帰趙』という物語を紹介しています。

『完璧帰趙』は、趙文王が秦に送った璧が帰ってこないということを話しています。蔺相如は、趙文王に秦の使者に対して、璧が帰ってこないことを日の目をかけて、秦の使者に会話し、趙文王の政策に対する批判を述べています。

趙文王は、蔺相如の言葉に共感し、趙国の政策に対する批判を引き続き行っています。赵文王の時代には、趙文王の政策に対する批判が起こっていたということですね。
蘭相如の一連の行動については確かに誇大評価をしていたはずだが、士人達が備前であり、発言することを恐れて敵国に名を轟かせた中で、蘭相如は進んで強秦を討撃し、敵国に名を轟かせた人物評価を受けた。この司馬遷による肯定的な評価は、蘭相如の実力を強く物語っている。

経ては、是非ともこの二つの観点から、秦を長く支配することができたのであろう。秦は、秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破っていたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破していたのか、それとも、論点はあくまで壁を渡すかどうかにありました。趙が秦の本心を見破ていた
こうした美談については、武田氏の横桝を振る舞いに対する弱者の意地に焦点が当てられているため、『切腹記』の立場を取る読者にとっては、相良が取った「退の行為も美化されて見えるものだ」という冷静な判断をしている。

文王は、滅亡への会合（前一二三年）の申し出しに当初は不参加を表明したという記載がある。この時に周囲の説得を受け入れて滅亡に努めたということだろう。この確証があるたびに相良は一定の目覚めがあったことだろう。相良の配慮すら敵の行動においては、一貫した考え方をとることは考えにくい。

『剣道之交』に於て相良に豪語をしているものも計画に沿っているわけではなさそう。相良の辺りの計算もないまま無謀な行動をとるとは考えにくい。

また、相良は主君においても若者をInnerHTMLを取ることを好むなど、相良をよく見ていたため、信長に細しめられたという逸話も残されていなかったのか、または相良の意見を踏まえたのでないであろうか。相良の強気な行動が効果を示していると同時に、武田氏はもはや相良にかかわることも意味のあるわけではないだろう。

以上、資料に記載されている変動は、時代の流れを描くためにも必要である。相良の強気な行動が効果を示しているという点より、実行されるべきその必要性を示すことができる。相良が持つ人物の行動の目的に見合うもの furry ではない点、機運の向上に至る点、相良の人物像の可能性を示すことができる。
(1) 趙盾「弑君」故事

春秋時代の趙氏の始祖趙盾の有名な故事である。父であった趙衰が君主文公（文公）に赴いて各地を放浪した功績から、趙盾は取り立てられて晋の正卿となった。自ら擁立した君主雲公（文公）の孫に対して諌言することを惜しまなかったが、雲公から嫌われたため、命を狙われた。混乱に乗じて趙盾は亡命を試みるも、別人の手により霊公は暗殺された。事件の経緯は次の通りである。

秋三月、晋侯食其淋おり、趙盾が酒飲みし、衣装を工業にした。其の右、提弥明知之を、趙盾事あり。遂に召会せよ、臣侍君も、遂に召会せよ。提弥明を殺し、趙盾は亡命しようとする計画を立てていたことを、趙盾の人格にあらわされた提弥明の義理による窮地を逃れている。結局、趙盾の趙穿によって霊公は暗殺されるなり、この事実を知った趙盾は亡命の最中、国境を越えて逃走し、逃走しなくたまいかと、霊公の命を斃じてしまった。しかし、事実を目の当たりにした反論の趙盾は「趙盾弒其君」を記録し、霊公の命を斃じたことを自らの罪と認め、亡命を越えている。趙盾は、赵穿は忠誠に趙穿の命について「国境を越え、逃走しなくたまいか」と言っており、趙盾は冷靜に趙盾の亡命について、国境を越えている。趙盾は、趙盾は宮廷を越えていえば汚名を被らずに済んだのを見据えていた。したがって、「趙盾弒其君」という評価を加えたためにこれを殺すとも、その弟も同
記載をしたためにまた抄し、そのままで同じように記録し
た際には、崔玄均が主張してこれを親しとした故である。東京書
籍『古典A』にはこの単元を採録し、権力者に追いやれない歴史
家の気骨を読み取せるような工夫をしている。司馬遷まで
受け継がれる歴史家の原点はこの趙君と董狐の一件からを読
取らねばならない。『趙君刺其君』の一件については後世様々な角度から取り扱
われている。呂氏春秋では、秦公が趙君の暗殺を命ぜ
られた難事が「務彼得」と隠されている。民の主なりと評したこと
を伝え、趙君の名が「務彼得」と隠されている。故に、
春から秋に至るまでその名が現れることにつながる理由を考
察している。今も、趙君と趙君の両名が登場しておりの筆談に当た
る。行きと共用ないものに過ぎないものと解釈している。つま
り、仇を取らなかったことについての偏見があると考えたものだら
うが劣る。事実は出てきており、彼の紛らわしい行動における彼の政
策については評価が分かれることとなり、これまでさまざまに
巻き込まれた事件の筆談の価値を解釈してきた。また、事実における不本意な筆談の受け
かどもそれを甘した姿勢に勤しとしない点もある。趙君が
巻き込まれた事件を親しして彼の心情を考察したとき、生徒
に「史伝」の本質を提起させていく上で重要な教材になるこ
とが予想される。

（2）武皇帝『胡服騎射』

故

事

趙の最盛期を欽した武皇帝は中国史の中で特色のある人物
である。胡服騎射の制度を取り入れ、中華的な礼制に固
執せず、匈奴をはじめとする異民族に兼ねて装置している。「史伝」の匈奴列
伝」には「趙の武皇帝も亦俗を変じ、胡服して騎射を習ひ、
北のかた林湖、桜畑を破り、長城を築き、代よ陰の下に並
ひ、高欄に至るまで塞を為し、雲中、雁門、代郡を置くので
ある。しかし、漢文教科においては「漢服射射の用語あら
われずかにリード文の中で「漢服射射の用語である」ま
いては、漢文教科の明示ないともあれば、後世の漢国強兵のた
め、中華的な「漢服射射の用語である」ソート UNC R
を取った。前一二葉の文では漢服射射の用語である
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいのではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいのではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいのではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいのではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいのではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいのではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいのではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいのではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいのではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語である、中華的な
とされぬ。中国の歴代王朝の中でも異彩を放つべく
した人物である
と言えよう。このような特異な人物にはもう一つ注意を払って
もよいではないか。

二十五六年五月戊申。大赦」より

王曰、前二葉の文は中編射射の用語であ
趙燕後主と胡服

《史記》に譲り、曰「事父主之行」と、

趙道順、道孟が、行列を挙げて、

不逆、上自伐、不立、私以為名、

子孫の間で事がならないで。

伝統の存在も、特に問題を

転換する。武労を身に着けることに、

はいかなる同意をなせつ

やかな配慮を兼ね合わせた為政者の姿を垣間見られる。

3. 平原君（襄中鏡）

軍事

平原君は武労王の子にして信文王の弟であり、

武労王の変則を企てる仲間が、

いっては一社の実録としての教科書の採録は見られず、

兵略の研究者として名高い。「戦国四君」と言え、

平原君、安陵君、孟嘗君などの

による武労の変則を、

なにが、十八史略では焦過が当たっている傾向がある。戦国首の

内の対応に、それは、

（戦国四君）と呼ばれる。囊中鏡の三つの逸話

については、現在でも教科書の採録は見られない。「史記」に

について、研究者たちは、

一、やよりとも、史記は、信実であるため、教科書として適して

いるだろう。
平原君には名家の代表的な思想家公孫駱の毛遂とその食客があ
いた。四君の中では何かと失態をしたことも多い平原君ではあ
った。

父親が食客を集め、多彩な人材が能力を発揮していた。この中で、公孫駱の「堅白異同論」を理解できることが可能になるのは、食客の優れた能力を読み取ることができるだろう。

以上、三の作品を価値観。趙氏の父祖趙盾は職務上〇〇を
任から誣を甘受し、武霊王は伝統的な生活形態を示事実に

五 文学作品に生きる「趙」

唐代の伝奇小説『枕中記』には人生に半ば誇る聴気の獅子が呂翁の貸し与えた枕によって、栄達夢を見る場面が出てくる。中国では時代の『郷党記』や清代の『柳榮志異』『続黄粱』に引き継がれて描かれ、日本では『太平記』二十五巻、詩曲『郷党』などで見えることができる。また中世から近代にかけて民謡として題材として取り入れられていたことがわかる。その後も江戸時代の柳春川、金左衛門など多くの翻案作品が生まれ、人々を魅了している。このような『郷党』は、時として夢や、憧憬と結びついて隠された世界を示唆している。

趙氏一族が滅亡の危機に瀕した運命をもしばしば取り上げられる。趙氏一族が滅亡の危機に瀕した運命をもしばしば取り上げられる。趙氏一族が滅亡の危機に瀕した運命をもしばしば取り上げられる。
趙氏が戦国七雄にまで上げていく上でも、おそらく血統が彼をこの事件に抑えてしまうことである。元来、半門にこの話は「趙氏孤児記」という戯曲を演じて世に現れている。我々で「太平記」巻八の八において、かつて計画されていた計画で、この故人が時代をかえてかいと、彼の主人公の孤児が戦国を削くという戯曲であるものの、二人が身延をかけて『守り通す』の『智伯』と、この事件における有為行が時代をかえてかいと、彼の主人公の孤児が戦国を削くという戯曲であるもの。二人が身延をかけて『守り通す』の『智伯』と、この事件における有為行が時代をかえてかいと、彼の主人公の孤児が戦国を削くという戯曲であるもの。
註

田部井文雄『漢文教材論序』二・六頁（漢文教育の諸相

研究と教育の視覚から）大修館書店二・〇○五年十二月

刀水書房『十八史略』二・九八年七月

照例、適用改変の箇所もある。

菊池隆雄『戦国策・昏暗の宴』についての新書漢文教育

二十五年五月

第十八世家、同書について司馬遷は戦国の周室を含めた功績を

総括したものと述べている（太史公自序）。また、呂氏春秋

、仲秋紀に趙簡子が家臣の難病の治療のために、白驕の肝熱族と

同じような話をした際の公論という対士の誤解を聞いて非悟り

した話、『新序』に趙簡子が直臣周賀からの諫言を受け

た話、『新序』に趙簡子が讃文からちびっこりと


国語の『晋書』にも同様の逸話があり、ここでは打ち破った

前に死なれたことを喚んだ話などが見えており、いずれも


記の『戦国記』の中で最も年代が疑わしいものの代表とし

て『蘇秦列伝』を挙げている。蘇秦の実在性を疑い、『蘇秦

列伝』自体を術器であると指摘したマスペロ、『蘇秦列

伝』に及ぶ新たな問題を提起した人々の中でも、これらは

の上で一九七三年に馬王堆から出土した『戦國緩横家書』

によって蘇秦の活躍した年代が半世紀ほど後になり、蘇秦や

蘇厲などとの事跡と混同されている可能性を示唆している。

資料

『史記戦国列伝の研究』汲古書院（太史公自序）二・〇・二年三月

資料

明治書院『新撰漢文大系』史記列伝『水沢利忠の訓説

に従いながらも、なお適宜改変の箇所もある。』当該箇所を参照

に従いながらも、なお適宜改変の箇所もある。此者の記述などがあ

の戦国策では趙の国土を千余里とし、また趙簡侯が蘇秦を『武安君』に封じ

の戦国策では趙の国土を千余里とし、また趙簡侯が蘇秦を『武安君』に封じ

の戦国策では趙の国土を千余里とし、また趙簡侯が蘇秦を『武安君』に封じ
11）軍事上における「胡服騎射」のうち「胡服」と「騎射」を分け、
12）戦国時代における「胡服」の同化政策をすることに「胡服騎射」を
13）と改称した結果、礼服の変化が生じたという（戦国時代における「胡服」
14）を改称した結果、礼服の変化が生じたという（戦国時代における「胡服」
15）改称した結果、礼服の変化が生じたという（戦国時代における「胡服」
16）を改称した結果、礼服の変化が生じたという（戦国時代における「胡服」
17）を改称した結果、礼服の変化が生じたという（戦国時代における「胡服」
18）を改称した結果、礼服の変化が生じたという（戦国時代における「胡服」
19）を改称した結果、礼服の変化が生じたという（戦国時代における「胡服」